

日本赤十字看護学会オータムセミナー

看護実践を豊かにする 現象学的研究の方法

2017年10月9日

首都大学東京 西村ユミ

看護の体験・経験と現象学

- 看護体験へ立ち帰る＝既存の知識や科学的思考から「事象そのものへ」

（西村ユミ・榊原哲也『ケアの実践とは何か』ナカニシヤ出版、2017）

- 看護師の志向性＝「他」：患者、環境世界、他の看護師等々

「何かをするときに、自分たちがどうやっているのかなどに関心がない。彼らはただそれをやることだけに関心がある」（サーサス『日常性の解剖学』マルジュ社、1995）

- 自覚の手前の経験へ

知覚は、知覚対象と知覚する側の意識（内面）とに切り分けられて、その後「構築したり構成されたりすべきものではなく」、「私のなし得る一切の分析に先立ってすでにそこに在る」「いつも世界内に在り、世界のなかでこそ」己を知る（メルロ＝ポンティ『知覚の現象学』みすず書房、1967）

「対話」の経験

対話において、「他者と私とのあいだに共通の地盤が構成され、私の考えと他者の考えとがただ一つの同じ織物を織り上げるのだし、私の言葉も相手の言葉も討論の状態によって引き出されるのであって、それらの言葉は、われわれのどちらかが創始者だというわけでもない共同作業のうちに組み込まれてゆく。」

「対話においては、私は自分自身から解放されている。」「他者の考えはたしかに彼の考えであり、それを考えているのは私ではないのだが、私はそれが生まれるやいなやそれを捉え、むしろそれに先駆けてさえいるのだし、同様に、相手の唱える異論が私から、自分が抱いていることさえ知らなかったような考えを引き出したりもするのであり、こうして、もし私が他者にさまざまな考えを考えさせるのだとすれば、他者もまた私に考えさせているわけである。」

(メルロ=ポンティ『知覚の現象学2』みすず書房、1974)

グループ・インタビュー

「ある特定の話題に対して、率直で、日常的な会話を作り出すこと」

「それぞれの人々の視点を発見し、また人々に異なった視点を表現することを促す」

(ヴォーン他『グループインタビューの技法』慶応義塾大学出版会、1999)

➤ 複数人の他者との語らい:

日常的な看護実践におけるカンファレンスや申し送り、相談や伝達などと同様の会話を作りつつ、同時に、彼らの関心を自分たちの実践に向け返すことによって、発見的な会話として機能する可能性がある。

研究例

看護場面の実践知に関する記述的研究

科学研究費補助金(課題番号16791354)基盤研究(C)の助成

- 「〈動くこと〉としての〈見ること〉」ー身体化された看護実践の知」(pp.127-152)石川准編『身体をめぐるレッスン3 脈打つ身体』岩波書店, 2007年1月
- ケアの意味づけに立ち会うーメルロ=ポンティの視線に伴われて、思想、11(1015)、pp.183-199、2008年11月
- 看護実践はいかに語られるのか?ーグループ・インタビューの語りに注目して、質的心理学フォーラム、2、pp.18-26, 2010年12月
- 看護ケアの実践知ー「うまくできない」実践の語りが示すもの、看護研究、44(1)、49-62、2011年2月
- (引用)『看護実践の語りー言葉にならない営みを言葉にする』新曜社、2016

施設と病棟

- 対象施設: 中部圏内に位置する約500床の総合病院
400余名の看護師が所属
- 募集方法: 臨床経験10年以上の看護師に募集チラシを配布
- 研究参加者: 看護師A、B、C、D、E、Fさん
全て女性
- 提案: 病棟のスタッフ同士、あるいは、同期の複数人で「看護を語る会」を行う。

語りを始める

【グループ・インタビュー導入部】

1. 事例に垣間見える苦しみへの応答(Aさん)
2. ただ一緒に立っている(Aさん)
3. いつもと変わらないケア(Cさん、Aさん)
4. その一言、その動作ひとつ(Eさん)

事例に垣間見える苦しみへの応答

A: 間質性肺炎の末期状態にあった患者と、それを見守る家族とのかかわり

家族に「呼ばれても①何もすることもできなくて、からだの位置を直したりとか、吸引をするくらいしかできなかったんだけれども、それでよかったのかなって思ってた」

患者は間もなく息を引きとった。その退院の見送りに顔を出すと、家族がAさんを見て②「看護師さん、ありがとう」と言ってくれた。

A: その時に①私は何もしてないのに、その時私じゃなくてもきっとその家族にとってはよかったんだろうけど。③自分の存在って何なんだったのかなってすごく考えたのが、もうちょっと半年ぐらい前になっちゃうんですけど、そういう事例っていうか、そういう経験があって。③自分のあり方っていうのか、看護するって何なのかなってすごく考えた一件でした。

ただ一緒に立っている

A:「やっぱり亡くなるとき」 90歳代の女性、肺がんの末期状態に付き添う新卒

A: (家族は) やっぱり身内が亡くなる場面ってすごい見ていられないのプラス、やっぱり怖かったんだらうなと思うんですよ。

(略) 本当に看取るだけだったんで、①ナースも何にも触らなかつたんですけど。
(略) やっぱり亡くなる人を目の当たりにしているその怖さっていうか、そのときにきつたとたとえ④新卒さんでも、そばに同じ部屋にいてくれれば、それが安心っていうか、なんか大きい存在なのかなってちょっと、昨日そんなことを思ったんですけど。その子も何をするわけでもなく、①ただ一緒に立ってただけなんですけど。それはそれで私たちはすぐさっと帰ったんですけど。でもそういうことだったのかなと思って…。

いつもと変わらないケア

C:「最近、亡くなった患者さん」。骨髄移植後に呼吸器合併症を発症。

C: 家族の人がついてるんですけど。(略)話しかけてあげようと思っても話しかけられないし、手を出そうと思っても器械があって怖いっていう状態で。(略)その家族を見たときに、やっぱり何か手の出し方とか、「器械につながれちゃって返事はしないけど声は聞こえてるんだよ。だから声をかけてあげてね」とか、そういうこと言ってあげたらすごくほっとされたみたいで。①そばに行って手を握って、応えはないけど話しかけてっていうことをやって。で、その最期亡くなった時に、私は看取らせてもらったんですけど、その時に②「あの時にそういうことを言ってくれたからよかった。ありがとう」って、そのお母さんから言われて(略)私はそれに対して①何をしてあげたっていうふうに思ってたんだけど、わからない状況の中で少しでも支えになってくれる人っていうか、何て言うのかな、うまく言えないんですけど、支えになってくれる人っていうか、④何となくいてくれるだけで何か心が安心っていうか、そういう存在を求めてたのかなっていうふうに思いました。

いつもと変わらないケア

A: 家族の人が、もう反応がなくなりかけている患者さんをもうその人自身じゃないっていうふうに見てる時に、看護師が入ってきて、③いつもと変わらない、日常と変わらないような声かけとか、あとケアしているのを見て、その人自身はまだここにいるんだよっていうことを家族が感じるのかなっていう気はしますけど。

私: 看護師の声のかけ方、

A: もってき方とか、例えば返事がなくても「お熱測りましょうね」とか「血圧測りましょうね」とか、あと③いつもと変わらない対応をしてくれる看護師を見て安心するっていうか、そういうのもあるかのなっていう気はしますけど。

その一言、その動作ひとつ

E: 別の人で、(略)高齡で、結局衰弱して肺炎がどんどん悪くなっちゃって...。(略)いつ呼吸が止まってもおかしくないような状態だったんですけど、一応行って、見直して、(略)一応「今は酸素の値も落ち着いているし、血圧もちょっと低いけどこの値でずっと安定しているから大丈夫だからね」って言って。やっぱりその言葉とか「ああ、そうですか」って言って。④でも、やっぱりその一言とか、(略)その「大丈夫だよ」っていうのプラス、「やっぱり本当に悪くなった時はもうオシッコも出ないし、これだけ体もむくんで、決して今はいい状態じゃないし、今はいつ何があってもおかしくないし」って言って、その現状はやっぱり言っていないといけないのかわかっていうか。そういうことでパニックになっちゃうかもしれないけど、でもそこを受け止めていかないと家族もその患者さんの死っていうのを受け止められないのかわかっていうか。④その言葉ってすごい大きいんだなっていうのは思いました。

その一言、その動作ひとつ

E: 若い看護師の一言応じて③さらっとその場を去った、その対応を見て「こんな言い方でいいのかな」と思った。「少し何かをしたことで、きっと気持ちも変わったのかな」と「ちょっと思った」。

→日常的なケアは決して「さらっと」対応することではなく、患者の苦しみや家族の動揺への③応答として、その状況に留まって関与しようとする志向性を宿したものであることを浮かび上がらせている。

→E: 若い看護師の対応を疑問視することで、これまでのAさん、Cさんの語りを肯定しつつ、それを自らの経験に組み込んで意味づけ直す。

E: 「③その一言とか、その動作ひとつとかっていうのに、すごいどういうふうに思うのか」、④家族が「どういうふうに私たちを見ているのか」を知りたい。

→④家族の視点へ

複数人の語りで何が行われたか？

➤ 問いの語り継ぎ

Aさん: 自身の経験した具体的な事例を語りつつ、自らの問いを問う

続く看護師(A含む): A事例1→自らの事例の語りに、Aの問いを織り込ませる

➤ 説明されないままに引き継がれた「患者(家族)の苦しみへの応答」

Aさん: 「何もできていない」「それでよかった」

Aさん: 新卒が家族の状態に引き留められて一緒にその場にいるのを見る(自分と同じ)

Cさん: 「何もしていない」が、呼吸器を着けた患者に家族がかかわれるように言葉をかける

Eさん: 「一言が大きい」、看護師のさらっとした対応への違和感

→語り継ぎ: 「看護師の存在・実践の意味」を捉え直す(更新)＝他の看護師の経験への理解

鷺田(1997)「意味は、不透明な仕方で生成する」(現象学の視線、講談社)

「共通の地盤」をつくる

志向的経験の語り継ぎ  共通の地盤

- 先の経験(事例)への他の事例の重ね合わせ
- 「他者と私とのあいだに共通の地盤が構成される」(メルロ＝ポンティ『知覚の現象学2』みすず書房、1974)
- 一人ひとりの経験は、個の主観の内部に閉ざされたものではなく、既に他の経験を含みもった「関係」
- 「自分が言い、また他人が答えてくれたことによって導かれ、もはや自分だけがその思考者ではないような自分の思考に導かれる」(メルロ＝ポンティ)

「共通の地盤」の先で

「引っかけり」から多様性へ

- ✓「最近、気になった」患者さんとのかかわり
- ✓いまだ生み出されつつある、問い直しをはじめたばかりの経験
- 他者とその経験について語り合うこと
 - その患者さんとのかかわりの意味を作り出しつつ捉え直す

【家に帰る準備を巡って】①

患者 賀川さん:乳がんのターミナル期。疼痛コントロール目的で入院。

B ナースサイドとしても、ここで寝泊まりするよりは、とにかく早く痛みのコントロールができたのを見て帰りたいという思いが強かったですね。帰りたいねって言ってた矢先に帰るっていう話になって、ちょっとばたばたとして。いや、もうちょっとうまく痛みのコントロールできるはずなんだけどっていう状況で、帰ることになったもんで、ちょっとばたばたしてたけど。どういうふうにしてあげるのが一番いいのかなって。…だから私個人の気持ちとしては、いや、せめて2~3日待ってほしいんです。

➤Bさん「ナースサイドとして」:「早く痛みのコントロールができ」「帰りたい」

《「いや」》 「もうちょっとうまく痛みのコントロールできるはず」

➤「ちょっとばたばたして」(急いで準備して)→→ 「私個人の気持ち」「せめて2~3日待ってほしい」

➤「ナース」「私(B)」の立場から、何が気にかかっているのかを浮かび上がらせていく

➤「どういうふうにしてあげるのが一番いいのかなって」:現在進行形→語りながら考え続けている

【家に帰る準備を巡って】②

B (看)だから本当はもうちょっとうまくコントロールができて、なるべくお薬の選択を難しくないような状況にして帰してあげたかったんだよ。でも(家)うちの人の気持ちも強かったから.....

F そう、(患)本人は、何か帰りたい、帰りたいって言ってて。

B そう、(患)帰りたくて帰りたくてしょうがなかったんだよね。だもんでまあ、(看)しょうがないなと思って帰したんですけれど。それが何となくもうちょっとうまくできるのについていう。

F どう出るかの結果がわかんないままとりあえず帰しちゃったっていう感じですね。張るの(張る薬)もちょっと増量してね、増量した日に帰っちゃったんですよね。

B ただ結果はどう出るかわかんないけどね。

F まあ、でも本当によかったかもしれない、もしかすると。

B そうそうそう。だからうちの人も本人も今だから帰れたって思えるかもしれないから。

F ここまで話が通じちゃうのかな。

【家に帰る準備を巡って】② 分析(1)

「視点」を入れ替えて語り進めていく＝立場による違いを理解していく

B (看)だから本当はもうちょっとうまくコントロールができて、・・・帰してあげたかったんだよ。

(家)でもうちの人の気持ちも強かったから.....

F (患)そう、本人は、何か帰りたい、帰りたいって言ってて。

B (患)そう、帰りたくて帰りたくてしょうがなかったんだよね。

(看)だもんでまあしょうがないな……。もうちょっとうまくできるのについていう。

2人が視点を重ねていく＝他の考え方に開かれる→→こだわりが解ける

F どう出るかの結果がわからないままとりあえず帰しちゃったっていう感じですね・・・

B ただ結果はどう出るかわからないけどね。

F まあ、でも本当によかったかもしれない、もしかすると。

B そうそうそう。だから(家)(患)うちの人も本人も今だから帰れたって思えるかもしれないから。

F ここまで話が通じちゃうのかな。

【引っかかりのもとを紐解いていく】①

B 本人よりも娘さんのことの方がちょっと気になったんだよね。……家族背景がお母さんと本人二人しかいなくて、仕事を辞めてまでこんな狭い病室で寝泊まりするぐらい面倒見たいと思ってて、…そこまで面倒見たいんだっていう気持ちがある家族と本人に対して、なるべく一番いい状況にもっていけたらいいな。要するに感情移入しちゃうってことかな(笑)。

F ありがとうございます。

B たぶん、そのタイミングで、たぶん惹かれたんだと思うんですよ、うちが。たまたま私がかかわるそういう……

私 退院するときにかかわる？ 帰る帰らないときに。

B ううん、退院のときもそうだったんだけれど、そういう痛み止めはどうする、どうしないだっ言っているときもかかわってたんだけど、そういう、私はタイミングの人だったのかなと思いつながらかかわってたんだけれど。何とかできないかなって思いが入ってっちゃったっていう。たぶん帰すよって言ったら、ああ、そうなんだって言ってただ帰せば帰せた、帰せちゃうじゃないですか。

【引っかかりのもとを紐解いていく】①

分析

In「何に引っかかったのか」という問いの応答としての語り

Fさん: 賀川さんのプライマリーナース

Bさん: 賀川さんの痛み止めの薬の調整、退院時の担当看護師

Bさん: 自身の引っかかりを語りつつ紐解いていく

条件1. 家族背景。そこまで面倒見たいんだっていう気持ちがある家族と本人に対して、なるべく一番いい状況にもっていけたらいいな。→感情移入

条件2. たぶん、そのタイミングで、たぶん惹かれた……。私はタイミングの人だった

条件3. 何とかできないかなっていう思いが入ってっちゃった

条件1-3がない: 帰すよって言ったら、ああ、そうなんだって言ってただ帰せば帰せた、帰せちゃう……

【引っかけりのもとを紐解いていく】②

F やっぱあの場合、娘さんで気になっちゃいましたね。

B ねえ。

私 同じように。

F 同じようについていうか、やっぱ娘さんにちょっと、

B あなたここまで頑張ってるしっていう。

F そのちょっと娘さんに感情移入したっていう感じもありましたけどね。・・・

私 娘さんとゆっくり話をする時間とか

F ゆっくりっていうか、まあ、受け持ちだったんで、.....でもそんな時間は取ってないですね。

B 何かかかわるんだったら、これからだったかなっていうタイミングだったんだんだよね・・・。

F でも最後に、「よかったです、相談にね、いろいろのってもらって皆さんに」って言っていて・・・。

【引っかかりのもとを紐解いていく】②

分析

BさんとFさんの関わりと差異

F 娘さんで気になっちゃいました。ねえ。

B ねえ。／あなたここまで頑張ってるしっていう。 **F、B→→引っかかりは「娘さん」**

F 同じようになっていうか、やっぱり娘さんにちょっと、

F そのちょっと娘さんに感情移入したっていう感じもありましたけどね。

F でもそんな時間は取ってないですね。

F→→ちょっと、感情移入したが、そんな時間取ってない

B かかわるんだったら、これからだったかなっていうタイミングだった **B→→これからかかわりたかった**

【注目していたことの違い】①

B 何かこう、自分たちがやり遂げられてないのに帰られちゃうみたいな思いはあったのかな。

F 私はここまで、何か足りないっていうのはそんなにそこまでは感じてないかもしれなくて、とにかくああいう状況であんまり帰るっていうことはあんまりないから、逆に本人は帰りたいて言ってるし、いくら帰りたいて言ってもなかなか帰れないっていう方が今まで多かったから(略)。痛みのコントロールは確かに不十分だったけど、この勢いに乗って帰しちゃうのもいいかなって、ちょっと思ってたんですよね。まあ、娘さん一人しかいないとはいっても、その娘さんがしっかり介護する構えがあるから。

- B 前ページの差異→→「自分たち」の思いに気づく
- F Bの「自分たち」という表現によって、Bとの違いを語る

【注目していたことの違い】②

B 私はたぶん、その緩和ケアのところがすごい引っかかってたんだね、今まで。だからだと思う。だけどたぶん、あの、Fさんはその娘さんを見てた。受けてくれる人だから、だから勢いで帰したのは、帰れない人の方が多い中において、これだけうちの人で帰す、帰したい、本人も帰りたい、先生も帰そう、タイミングをみんなが合う人ってそうそうないじゃんね。

F そう。そこで、まあ疼痛コントロールさえできてれば完ぺきだったけど、なかなか完ぺきな状態では帰れないもんね。

B だからどちらかというと、私はそっちの痛みの方にだけ目が行ってたのかなって気も今したんだけど。

B 要するに医療側としての提供が不十分な状況で帰るっていうところに、たぶん不満足が。

- B Fの語ったBとの差異→→「私はたぶん」と言って、自分のこだわりとFとの違いを語る
- B 「今したんだけど」→→語りながら、自身の視点とFとの違いがこの場で生まれた

複数人で看護を語る／ 拡張された経験を構成する

- 複数人で語ること⇒看護実践の意味を更新させつつ作る
- 他者(過去の自己)の経験・視点に触発されつつ、自己の経験を捉え直す
- 経験に多様な視点や意味を与える

「他人によって自己を吟味すること」、「自己によって他人を吟味すること」、そして過去の自己を今の自己によって吟味すること(メルロ＝ポンティ)

「他国や他の時代の人々にも接近可能となるような一個の＜拡張された経験＞を構成すること」

「対象が「他者のもの」である時に課せられてくるような、そしてわれわれみずからわれわれ自身を変える必要に迫られるような一つの考え方」「側面的普遍」